

# 江戸儒學と社會

## －武士の書院と『孔子家語』という觀點から－\*

南澤良彦・簡亦精\*\*

- I. 序言
- II. 江戸儒學前史－足利學校と武家社會
- III. 江戸儒學と官立學校－昌平坂學問所、藩學
- IV. 江戸儒學と社會－『孔子家語』を通しての考察
- V. 結語

### 【국문초록】

일본 에도 시대는 관리 임명에 있어서 과거 제도와 같은 조건을 두지 않았고, 기본적으로는 세습으로 이루어졌다. 지배계층의 정점에 서 있던 사무라이는 왜 유학 교육을 받아들였는가? 에도 시대에 유학을 가르친 학교는 비록 서원(書院)이라는 명칭으로 불리진 않았지만, 성질상 강학, 장서, 제사와 같은 기능을 갖추고 있었기에 사실 서원과 차이점이 없었다. 동아시아 서원 및 유학을 연구하는 데 있어서, 에도 유학은 매우 중요한 지위를 지닌다. 에도 유학의 발전과 당시 사회 분위기는 매우 깊은 관련이 있다. 본고에서는 유학을 가르친 학교 및 유학자들의 학술적 경향, 그들이 운용한 교재와 학규(學規) 등을 모두 연구 대상으로 삼는다. 에도 시대에 유학을 가르친 학교는 다만 사무라이의 서원일뿐만 아니라, 사회 전체를 이끄는 주요 역량이기도 했다. 사실, 에도 유학자들이 모두 주자학만을 연구한 것은

\* 이 논문은 2019년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NRF-2019S1A5C2A02082813).

\*\* 주저자 : 南澤良彦, 九州大學 大學院 人文科學研究院 中國哲學史講座 教授  
/ nanze@lit.kyushu-u.ac.jp

\*\*\* 공동저자 : 簡亦精, 九州大學 人文科學研究院 專門研究員

아니었는데, 『공자가어(孔子家語)』 또한 당시 유학자와 사무라이의 주목을 받았다. 『공자가어』는 도쿠가와 이에아스가 즐겨 읽었던 책이었기에 사무라이의 많은 사랑을 받은 것이다. 본문에서는 “『공자가어』의 가치는 무엇인가?”, “당시 유학자는 왜 『공자가어』를 읽었는가?” 이러한 문제의식에 착안하여, 에도 유학의 변천 및 사무라이 사회를 지탱하던 핵심 요소는 무엇인가에 대해 고찰해볼 것이다. 이를 통해 본고에서의 토론이 동아시아 서원 연구에 하나의 새로운 관점 및 일련의 공헌을 할 수 있기를 희망한다.

주제어 : 에도 유학, 사회, 사무라이(武士), 번학(藩學), 사무라이 서원, 아사카가 학교(足利學校), 츠카다 타이호(冢田大峯), 공자가어(孔子家語)

## I. 序言

### 江戸時代の社會

近世東アジア世界に普遍的現象として科擧の實施と書院の發達がある. ところが、日本だけは科擧制度を採用しなかったにもかかわらず、書院の性質と極めて類似したさまざまな學校が發達していた<sup>1)</sup>.

江戸時代、日本の社會は士農工商という四つの身分から構成された身分制社會であった. 士が支配階級で、その下に農、工、商の三つの被支配階級が置かれ、士農工商の各身分は世襲された. 注目すべきは、士農工商の四民は中國古代の制度であるが<sup>2)</sup>、中國の士が「學んでその位にいる者」<sup>3)</sup>と規定されるだ

1) 難波征男, 「“日本書院”的研究現狀與課題」(『湖南大學報(社會科學版)』 21-3, 2007年)を參照.

2) 例えば, 『春秋穀梁傳』成公元年に、「古者有四民. 有士民. 有商民. 有農民. 有工民.」とある.

3) 『漢書』食貨志には、「士農工商, 四民有業. 學以居位曰士, 闢土殖穀曰農, 作巧成

けで、出身の身分を問わないのに対し、日本の「土」は厳格な身分制度と世襲制で固定化された支配階級だったことである。しかも、中國の「土」が基本的に文人であったのに対し、日本の「土」は武士だったのである。

江戸時代が身分制封建社會であり、支配階級が武士であったことは、この時代の社會の大きな特徴であり、それが學問・教育に対しても深甚な影響を与えたことは想像に難くない。

江戸時代の日本は、江戸に置かれた徳川將軍を戴く幕府の下に、260前後の大名と呼ばれる地方君主が治める大小の領地から成り立っていた。それら大名が治める領地は藩と呼ばれた。

### 昌平坂學問所と藩學

江戸時代には中央政府である幕府は、學問、特に儒學を奨励し、江戸に學問・教育のための學校、昌平坂學問所(昌平黌)を開設した。大名たちもそれぞれの藩において同様に學校を建て、主に儒學を教育した。それら大名たちの學校は藩の學校という意味で、藩學もしくは藩校と呼ばれた。藩學の数は全國で295箇所あったとされる<sup>4)</sup>。江戸時代の藩の数は260前後だったから、一藩に一校以上あったことになる。現在の日本の國公立大學の数が184校(國立大學86校、公立大學98校<sup>5)</sup>)だから、江戸時代の學問・教育施設は相当充實していたことになる。

これら江戸時代の幕府、諸大名の學校には漢籍を中心にした書籍が所藏され、また孔子廟が設置されたところも多い。書院が備えるべき要素として、講學、藏書、祭祀の三つが挙げられるが、昌平坂學問所や相當数の藩學はこの條件を満たすことになる。ただし、昌平坂學問所、藩學は幕府、藩が設立した

---

器曰工，通財鬻貨曰商」とある。

4) 難波征男 前掲論文 19頁を参照。

5) 文部科学省HP【學校基本統計(R3速報値)】を参照。

官立學校であり、民間の學校として發展した書院とは性質を異にする。しかしながら、藩學の場合、設立は官學系だが、實質的に民間系だとも言われており、多くの點で書院と共通する性質の學校であることは事實である<sup>6)</sup>。藩學はいわば武士の書院なのである。

### 本論考のねらい

江戸時代の日本では、幕府や藩の官僚機構は基本的に世襲制であらかじめ決まっており、昌平坂學問所や藩學の學業成績が關與する餘地は多くはない。したがって、立身出世という點においては、それら官立學校の教育から受ける恩恵は極めて小さい。

それでは江戸時代の官立學校はどういう目的で、どのような教育を施したのだろうか。また、それら學校では特に儒學が重んじられたが、儒學はどのような役割を擔ったのであろうか。

本論考は、江戸時代の官立學校の設立経緯、教育理念、教育内容を分析し、江戸時代の武家社會における學問、特に儒學の意義の一端を解明しようとするものである。

分析のための手掛かりの一つとして着目するのが『孔子家語』である。『孔子家語』は、江戸幕府を開いたばかりではなく、江戸儒學の開基をも行った徳川家康の愛讀書であり、江戸時代を通じてよく讀まれた。『孔子家語』の讀まれ方とその變化は、江戸儒學と武家社會の思潮とその變化を反映しているのであり、それを檢證することは、本論考に大いに役立つであろう。

6) 吾妻重二、「東アジアの書院について－研究の視角と展望－」(『東アジア文化交渉研究』別冊2、關西大學文化交渉學教育研究據點、2008年) 13頁を 参照。

## II. 江戸儒學前史—足利學校と武家社會

### 1. 室町時代の足利學校

#### 1) 足利學校の成立

足利學校(あしかががっこう)(栃木縣足利市)は、江戸時代以前の日本で最も著名な學校である。

足利學校は漢學専門の學校であり、その敷地内に教學施設(方丈)、學生の寄宿舎(衆寮)、孔子廟(聖廟)を擁して、貴重な漢籍を所藏して學生を教育し、定期的に孔子の像を祀る釋奠の禮を行った。これは、書院が藏書、講學、祭祀の三要素を備えたことと極めて類似する。

足利學校は校則を備え、後に出版事業も行なったから、ますます書院と類似していると言えよう。

足利學校の創建については諸説あり、未詳とせざるを得ないが、確實に言えるのは、15世紀頃に關東管領(かんれい)、上杉憲實(うえすぎ・のりざね)によって再興されたことである。憲實は領地を附與し、漢籍を寄贈し、鎌倉の禪宗(臨濟宗)寺院、圓覺寺から儒學、特に易學に秀でた快元(かいげん)を招いて、庠主(しょうしゅ、校長)とした。

足利學校はその後、室町時代、安土桃山時代を通じて榮え、16世紀中頃の七代庠主、九華(きゅうか)の時に全盛期を迎え、生徒は三千を数えたと言う<sup>7)</sup>。

安土桃山時代に來日し、織田信長に親しく接したイエズス會士、ルイス・フロイスはその著書『日本史』の中で足利學校に言及して、阪東(關東地方)にある「日本で最も有名な僧侶の大學」と述べる<sup>8)</sup>。

7) 川瀬一馬、『増補新訂 足利學校の研究』新装版(東京：吉川弘文館、2015年) 90頁。

8) ルイス・フロイス、『日本史』2(東京：平凡社、東洋文庫35、1965年) 42頁を 参照。

## 2) 足利學校の校規

足利學校が漢學専門であるのは、實質上の創建者である憲實が定めた校規三箇條に規定された。第一箇條を次に引用しよう。

一『三註』『四書』『六經』『列子』『莊子』『老子』『史記』『文選』以外は、學校において講義してはならない。舊規に記載されている者には、いまさら禁じるまでもない。今から以後は、脇道の談義でも禁止する。しかし禪宗寺院の有名な高僧で莊内にいる者は除外する。禪の語録、詩註、文集以下の學問は、幸いに各地に今日現存する禪宗寺院がある。また禪宗以外の佛教徒にはその教派の寺がある。莊内においては、儒學以外はひたすら禁止するものである。加えて、先ほど記載した書籍以外は、たとい三、四人の仲間が誘いあって、講席を開いたとしても、在籍者は、學校から固く禁止される規則があるだろう。それでもなお承知できないなら、お上に訴えられるがよからう。(引用者譯)<sup>9)</sup>

すなわち、憲實は足利學校で講義する書籍を、『三註』『四書』『六經』『列子』『莊子』『老子』『史記』『文選』に限定したのである。三註とは、『蒙求』『千字文』『胡曾<sup>10)</sup> (詠史詩)』のことである。これら三書はいずれも初學の識字書である。これらを習って漢字と漢文に習熟し、ついで儒學の四書五經、道家の『列子』『莊子』『老子』三書、史部の『史記』、集部の『文選』を學ぶのである。

憲實がこれら以外の書籍を読むことを禁じたのは、足利學校が、佛教徒の學校であり、學生は僧侶であったことと關係するだろう<sup>11)</sup>。僧侶は當然ながら、

9) 原文は、『古事類苑』文學部 洋卷 第2卷1107頁。川瀬一馬前掲書35頁を 参照。

10) 胡曾是中國晩唐の詩人。『新唐書』卷六十藝文志四に、「胡曾安定集十卷」と著録。『全唐詩』卷二十四に、「胡曾、邵陽人。咸通中、舉進士不第。嘗爲漢南從事安定集十卷、詠史詩三卷。今合編詩一卷。」とある。

11) 僧侶が書院と關わりが深いことは、中國唐代に遡ることができる。Minamizawa Yoshihiko and Chien Iching, An Enquiry into the Origins of Confucian Academies and the Mingtang in the Tang Period, V. Glomb, E.J. Lee & M. Gehlmann ed., Confucian Academies in East Asia (Leiden: Brill Academic

ともすれば、佛典や詩文を學ぼうとするからだ。ところが、それらは京都や地方にある禪宗及び禪宗以外の宗派の佛教寺院で學ぶべきであり、足利學校においては、固く禁じられた。講義どころか、朋輩と私的に談義することさえ禁制の対象とされたのである。學校(あしかがが

### 3) 足利學校の藏書

一方で、漢學に關しては、足利學校には、當時最高峰の漢籍が所藏されていた。今日現存する以下の書籍はその代表例である。

周易注疏(全十三本)(宋版 國寶)  
 尚書正義(全八本)(宋版 國寶)  
 禮記正義(全三十五本)(宋版 國寶)  
 毛詩注疏(全十三本)(宋版 重要文化財)  
 春秋左傳注疏(全二十五本)(宋版 重要文化財)  
 文選李善五臣註(宋版 國寶)

これらはいずれも中國南宋時代に出版された貴重な書籍であり、現在は國寶ないし重要文化財に指定されている。五經のうち、『周易注疏』は憲實の子の憲忠(のりただ)の寄進であり、他の四種は憲實の寄進である。また、『文選』は北條氏政(ほうじょう・うじまさ)が九華に附與した金澤文庫(かなざわぶんこ/かねざわぶんこ)<sup>12)</sup> 舊藏本である。

---

Publisher, 2020)を参照。

12) 金澤文庫は鎌倉時代中期に北條實時(さねとき)が、現在の横濱市金澤區にあった屋敷に創建した武家の文庫である。所藏の書籍には宋版も少なくなく、足利學校に移ったものもある。

## 2. 足利學校と徳川家康

### 1) 伏見版と武士の社會

足利學校の庠主は代々、禪宗の高僧が務め、時の權力者たちと親交を深めた。七代庠主の九華(きゅうか)は關東に覇を唱えた小田原の北條氏康(ほうじょう・うじやす)、氏政父子の要請で『周易』と『三略』を講義した。

また、九代庠主、三要素佶(さんよう・げんきつ)は、豊臣政權の第二代、關白豊臣秀次(とよとみ・ひでつぐ)の要請で、多くの漢籍と共に京都に移り住んだ。その後、實權を握った徳川家康(とくがわ・いえやす)の信任を得、京都伏見(現在の京都市伏見區)にあった圓光寺(えんこうじ。その後現在の京都市左京區に移轉)を足利學校の分校とし、家康が與えた活字を用いて漢籍を刊行した。これが所謂、伏見版(ふしみばん)である。刊行された書籍を列挙すれば次の通りである。

1599年(慶長4)刊

(六卷 附素王事記一卷)(四冊)

三略(三卷)(一冊)

六韜(六卷)(二冊)

1600年(慶長5)刊

貞觀政要(十卷)(八冊)

三略(三卷)(一冊)

六韜(六卷)(二冊)

1604年(慶長9)刊

三略(三卷)(一冊)

六韜(六卷)(二冊)(二版あり)

1605年(慶長10)刊

周易(六卷)(三冊)

1606年(慶長11)刊

七書(二十五卷)(七冊)(二版あり)<sup>13)</sup>



伏見版の傾向は、儒學書、政書の他、兵法書が多いのが特色である。これは家康の好みを表しているとも言われるが<sup>14)</sup>、足利學校の創立の趣旨とも合致する。

すなわち、足利學校は儒學と兵學に特化した漢學専門の學校だったのである。しかも、儒學の方面でも、特に易學に特色があった。

足利學校は數多くの經書を講義し、漢學一般の教育を行ったが、實はそれらの漢學教育は準備段階に過ぎず、目的は易學の教育であり、さらには究極の目的は易學の應用である占筮術の修得であった<sup>15)</sup>。足利學校が室町時代を通じて多くの學徒を集めた理由は、當時の武家社會が占筮に強く依存し、占筮術者の需要が極めて高かったことに求められる<sup>16)</sup>。

中世・近世初期には、武士は日常的に死命を決する判斷を迫られる場面が多くあった。そのため、武士は占いに依存し、それは日常生活の一部だったのである。

中國、朝鮮の書院は、士大夫層によって營まれ、主に科擧受験を目指す士大夫の子弟のための高等教育機關であった。これに對し、書院に相當する日本の高等教育機關(足利學校)の擔い手、享受者が武士であったことは注目に値しよう。

日本の中世・近世を代表する高等教育機關である足利學校は、武士階級が設立、運營し、武士階級の子弟教育、顧問を擔當する教員、助言者の養成を目的とした。足利學校の京都分校である圓光寺で刊行された伏見版に、兵法書の占める割合が甚だ大きいのも、それと深く關連するであろう。

13) 川瀬一馬, 前掲書 108頁を参照。

14) 同上。

15) 川瀬一馬, 前掲書 174~175頁を参照。

16) 川瀬一馬, 前掲書 175頁を参照。

### Ⅲ. 江戸儒學と官立學校—昌平坂學問所、藩學

#### 1. 昌平坂學問所

##### 1) 林家の家塾と孔子廟

1603年(慶長8)、家康は征夷大將軍に叙せられ、江戸に幕府を開くと、儒學者、林羅山(はやし・らざん)を侍講(じこう、君主に學問を講義する學者)とした。これが江戸儒學の開基であり、日本の儒學にとって畫期となる。

林羅山、姓は林、名は忠(ちゅう)、一名は信卿(のぶかつ)。先祖は加賀(現在の石川縣)の武家で藤原氏の末裔であると自稱した。後に紀州(現在の和歌山縣)に移り、父の信時(のぶとき)の代に京都に出てきたが、浪士の身分だった。

羅山は少年時、臨濟宗建仁寺(けんにんじ)に入って、儒學を學んだ。建仁寺は京都最古の禪寺で、十世住持(じゅうじ、住職)の円爾(えんに)が中國宋から四書五經の新注本の他、多數の儒學書を持ち歸っていたのである<sup>17)</sup>。羅山は宋學に傾倒し、二十歳になる頃には朱子學の講義を行うまでになっていた。

羅山は家康、秀忠(ひでただ)、家光(いえみつ)、家綱(いえつな)の四代の徳川將軍に侍講として仕えた。1630年(寛永7)に江戸上野忍岡(しのぶがおか、現在の臺東區上野)に土地5,353坪と資金200兩を下賜されて、家塾、書庫を、さらに1632年(寛永9)には尾張藩主徳川義直(よしなお)の援助により孔子廟(先聖殿)を建てた。

書庫には數千卷の書籍を所藏し、また有名繪師(狩野山雪(かのう・さんせつ))に、伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文王、武王、周公、孔子の十一聖、並びに顔回、曾子、子思、孟子、周敦頤、程顥、程頤、張載、邵雍、

17) 円爾が持ち歸った書籍については、拙稿「『説文解字』在日本」(『計眞文化研究(二)：第二屆計眞文化國際研討會論文集、第2卷』、中國社會科學出版社、2015)104頁を参照。

朱熹の二十一幅の肖像畫を描かせた<sup>18)</sup>。これは所謂道統を意識した、朱子學的  
正統觀の表明に他ならない。とはいえ、忍岡の家塾の學生は在學數、20~30名  
を數えるに過ぎず、幕府の教育機關ではなく、林家の私塾の性質を脱していな  
かった。したがって、朱子學が幕府の官學となったわけでもなかったのである。

## 2) 湯島聖堂と昌平坂學問所

事態が大きく變化したのは、五代將軍綱吉(つなよし)の時代になってからで  
ある。綱吉は忍岡の林家家塾の増築、孔子廟修理の費用を負擔し、公的性格を  
附與した。元祿三年(1690)には幕府は忍岡の孔子廟の移轉を命じ、湯島(現在の  
文京區湯島)の6000坪の敷地に壯麗な廟宇を建て、綱吉筆の「大成殿」の扁額を  
與えた<sup>19)</sup>。これが湯島聖堂である。

1797年(寛政9)、十一代將軍家齊(いえなり)は儒學振興を目的に、湯島聖堂  
に附屬する形で幕府直轄の學問所を創建した。これが昌平坂學問所である。入學  
者は武士に限った。また、寄宿舎を設けて、幕府の家臣の子弟を收容し、書生  
寮を設けて諸藩の家臣の子弟を收容した。

さて、昌平坂學問所の成立は、寛政異學の禁と關係が深い。寛政異學の禁  
とは1790年(寛政2)、幕府老中松平定信(まつだいら・さだのぶ)が寛政の改革の  
一環として打ち出した政策で、幕府公認の學問を朱子學に限定し、それ以外  
の學問を教えることを禁止したのである。これを天下に明確に示すため、林家  
の私塾を幕府直轄の官學に改め、大々的に正學(正統學問)である朱子學を幕臣  
のみならず諸藩の家臣の子弟に教育し、日本全國津々浦々に至るまで浸透さ  
せることを目論んだのである。

18) 堀勇雄『林羅山』(東京：吉川弘文館、『人物叢書』オンライン版185) 191頁を参照。

19) 堀勇雄、前掲書 192頁を参照。

### 3) 昌平坂學問所における「白鹿洞書院揭示」

そのことの表れの一つが昌平坂學問所における「白鹿洞書院揭示」の重視である。

「白鹿洞書院揭示」とは周知の通り、朱熹が白鹿洞書院を再興した時、書き記した學規で、日本でも好まれた。江戸時代に著された注釋、講義、研究書は枚舉にいとまがない<sup>20)</sup>。

昌平坂學問所ではじめて「白鹿洞書院揭示」が講義されたのは、1792(寛政4)9月15日とされる。この日、林家當主、大學頭(たいがくのかみ、昌平坂學問所の長官)林信敬(のぶたか)に代わり、一族の林信久(のぶみち)が代理で「白鹿洞規」(「白鹿洞書院揭示(白鹿洞書院學規)」)を講義した。この後、昌平坂學問所の毎年の開講は「白鹿洞書院揭示」で締め括られるのが恒例となった。講義が行なわれる間、聴講者には印刷された「白鹿洞書院揭示」が各人一冊下賜された<sup>21)</sup>。

「白鹿洞書院揭示」の講義は、毎月六回(1800年(寛政12)七月の制度改革以降は毎月三回)行われ、大名、幕臣、藩士、浪士、要するに武士階級の者は皆聴講を許された。ただし、聴講者の姓名は記録され、毎月出缺が報告されたから、聴講は奨励というよりは強制に近かったと言える。

1800年4月の制度改革以降は藩士、浪士は聴講が許されなくなった。これは昌平坂學問所での「白鹿洞書院揭示」が講義され始めてから足掛け九年、ようやく「白鹿洞書院揭示」が普及し、朱子學がある程度浸透した手應えを感じて、藩士、浪士にまで聴講させる必要性がなくなったからであろう。

一方で「白鹿洞書院揭示」の教育は、昌平坂學問所の授業に組み込まれ、教

20) 江戸時代における「白鹿洞書院揭示」の受容と傳播については、關山邦宏「『白鹿洞書院揭示』の諸藩校への定着とその實態」(『教育研究』21, 青山學院大學教育學會, 1977)を参照。

21) 昌平坂學問所舊藏の『白鹿洞書院揭示』が現在、國立公文書館に所藏される。表紙には「白鹿洞學規」と題され、6頁、裏表紙裏には「安政六己未(1859年)正月 直祺獻」とある。

官二名に日替わりで讀みを授けさせ、六のつく日にそれまでの讀みを通讀し、毎年九月に小試験を行った<sup>22)</sup>。

こちらの方は諸藩出身の學生にも課せられたから、昌平坂學問所を卒業して地方に戻った彼らによって、「白鹿洞書院揭示」は幕府の思惑通り、地方へと傳播して行った<sup>23)</sup>。

#### 4) 明倫堂の成立

幕府に土地と資金を提供されて、江戸に林羅山が私塾と孔子廟を營んだ17世紀前半、諸藩でも儒學者を抱える例は少なくなかった。昌平坂學問所に先立って、藩學を立てた藩も存在した。

幕府は昌平坂學問所を強力な據點とし、授業生を媒介として全国の諸藩の學問・思想を朱子學一色に染めようと圖った。これに對し、諸藩の受容の様相はさまざまであった。

御三家の中でも尾張藩は藩祖、徳川義直(よしなお)が儒學愛好甚だしく、1630年(寛永7)に林羅山の上野忍岡の學塾に孔子廟を寄進したが、實はこれに先立つ1626年(寛永3)すでに、名古屋城内に孔子廟を營んでいた。

尾張藩における本格的な藩學は1783年(天明3)に開校した明倫堂である<sup>24)</sup>。この時、初代督學(校長)となった細井平洲(ほそい・へいしゅう)は、尾張の農家の次男で、長崎で中國語を學んだ後、1745年(延享2)に江戸で私塾、嚶鳴館(おうめいかん)を開いて身分を問わず教えた。その學問は朱子學、古學<sup>25)</sup>のいずれにも偏らない、いわゆる折衷學派に屬するとされる。

22) 「昌平志」卷二(同文館編輯局編、『日本教育文庫』學校篇、同文館、1911年) 84頁。

23) 關山邦宏、前掲論文を参照。

24) 1749年(寛延2)に儒學者、蟹養齋(かに・ようさい)に學問所を開設させ、「明倫堂」の名を與えている。ただしこの時は、經營困難で閉校に追い込まれている。

25) 古學は宋明理學の解釋を排して直接『論語』『孟子』を研究してその意義を理解すべきであると考えた學派。

昌平坂學問所より十四年前に創設された明倫堂でも、寛政異學の禁の影響は免れなかった。1792年(寛政4)以降、岡田新川(おかだ・しんせん)を督學に迎え、朱子學を講じた。しかしながら、1811年(文化8)、冢田大峯(つかだ・たいほう)が督學に就任するや、事態は一變する。

冢田大峯は信濃(現在の長野縣)の儒醫の家に生まれた。名は虎、通稱は多門。はじめ朱子學を學ぶも、江戸で細井平洲の助講となり、古學に轉向。1785年(天明5)に江戸に雄風館という家塾を開いた。その學問は細井平洲と同じく折衷學派に屬する。

大峯は寛政異學の禁に強硬に反對する寛政の五鬼と稱された五名の學者の筆頭であった。大峯は尾張藩主宛に一通、松平定信宛に二通、合計三通の意見書を提出して反對意見を述べた。その主張の重點は次のようなものである。

學問には元來流派はなく、堯舜三代の道を本とし、聖人孔子の教法によって、人々に孝悌忠信仁義を導き、天下國家を治めること以外の教えはない。人に好みの違いがあるように、學問も朱子學に限定する必要はなく、人々の好みに任せて、修業させればよろしい。忠孝仁義の道に導き、人材を教育する學問であれば、學派に關係なく、自由に學べるようにすればよろしい<sup>26)</sup>。

大峯は、學問の目的は孔子の教育方法によって、孝悌忠信仁義という人倫道德を身につけ、天下國家を治めることにありとし、この目的に到達できるなら、手段である學派は問うべきではないと主張する。ことさら朱子學を否定するのではなく、學問の自由を要求したのである。結局、大峯の意見は却下され、異學の禁が撤回されることはなかったが、この意見書には大峯の學問觀がよく窺える。

26) 冢田大峯, 「大峯意見書第二」(關義一郎編, 『日本儒林叢書』第三冊史傳書簡部「寛政異學禁關係文書」, 東洋國書刊行會, 1928年)を参照。

### 5) 冢田大峯の明倫堂改革

大峯は明倫堂督學に就任すると、1812年(文化9)正月に、「戒約」「讀書次第」等を示して、その教育方針を明らかにした。

「戒約」では、學問の目的が、孝悌忠信の儒教倫理を根本とする官吏の育成にあることを述べる。そのために、『孝經』『論語』等をはじめとする儒學書を研究する「本業」(基本學問)、史書・諸子から現實社會を知る「助業」(補助學問)に努めるのだとする<sup>27)</sup>。

次いで、「讀書次第」では具体的にテキストを明示して、その學習目的を述べる。最初に、必ず日課として熟讀して研究し盡すべき十三書を指定する。すなわち、1『孝經』2『六記』<sup>28)</sup>3『論語』4『孔子家語』5『孔叢子』6『毛詩』7『尚書』8『周易』9『禮記』10『春秋經傳』11『國語』12『孟子』13『荀子』(數字は筆者が便宜的につけた。)の十三書である。

次に參考すべき經書として『周禮』『儀禮』『公羊傳』『穀梁傳』の四書を挙げる。以上十七書の學習、研究が「本業」である。

つぎに助業として諸子、史書を列挙する。『管子』『晏子』『老子』『列子』『莊子』は、參考にすべき「古訓」が豊富で、絶對讀むべきとする。『戰國策』『史記』『漢書』『後漢書』『三國志』『晉書』以下の歴史書は、順次通覽すれば人物批評を行い、歴史の流れを理解できる。

戰國以降諸子百家の書は、通讀すれば知識を豊富にし、道義・得失を辨えることができる。日本の『六國史』以下の歴史書もまた、通覽すれば日本の歴史を概觀できる。ここに挙げた以外の國內のあらゆる書はどれも讀むべきである。

以上が助業(補助學問)である<sup>29)</sup>。

27) 冢田多門(大峯)「戒約」(『日本教育文庫』學校篇、明倫堂規則)189頁を参照。

28) 『六記』は『禮記』中の「學記」「表記」「坊記」「緇衣」「中庸」「大學」の六篇を抜粋したもの。

29) 冢田多門(大峯)「讀書次第」(『日本教育文庫』學校篇、明倫堂規則)192-193頁を参照。

冢田大峯には元來、多くの著作があった。その中から儒學書に對する注釋書と關連書を列舉しよう。(數字は明倫堂讀書次第の日課必修指定の十三書につけた數字と對應する。)

- 1 冢註孝經一卷(1778年(安永7))
- 2 冢註六記六卷(1787年(天明7))  
冢註中庸一卷(1777年(安永6))
- 3 冢註論語十卷(1784年(天明4))  
論語羣疑考(1814年(文化11))
- 4 冢註家語十卷(1792年(寛政4))
- 5 冢註孔叢子十卷(1795年(寛政7))
- 6 冢註毛詩二十卷(1801年(享和1))
- 7 尚書補註(1798年(寛政10))  
古文尚書補註十三卷(1801年(寛政13))
- 8 冢註周易八卷(1803年(享和3))
- 10 增註春秋左氏傳(1807年(文化4))
- 11 國語增註(1801年(享和1))
- 12 荀子斷(1795年(寛政7))
- 13 孟子斷(1795年(寛政7))

(關連書)

- 荀子正文二十卷(1806年(文化3))  
古文孝經和字訓(1824年(天明8))  
戰國策略註(1803年(享和3))  
冢註老子上下卷(1803年(享和3))

大峯は明倫堂督學に就任する1811年(文化8)までに、明倫堂規則讀書次第の必讀書とされた書籍13種類のうち、實に12種類のもの注釋書を上梓していた。恐らくは、それらはすでに江戸の私塾、雄風館で實際に使用していたであろう。すなわち、大峯は江戸の自分の私塾でのシステムをそのまま尾張明倫堂



に持ち込んだのである。

#### IV. 江戸儒學と社會—『孔子家語』を通しての考察

##### 1. 『孔子家語』略説

大峯が明倫堂に導入した課程で注目すべきは、『孔子家語』を必修の日課にリストアップしていたことである。

周知の通り、『孔子家語』は魏の王肅の偽作説があり、清朝半ば以降、慎重に扱われていた書籍である。しかしながら、前近代における東アジア世界で、『孔子家語』は實によく讀まれた書籍だった。日本も例外ではなく、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、伏見桃山・江戸時代を通じて大變人氣があった。

##### 1) 『孔子家語』と王肅偽作説

ただし、周知の通り、『孔子家語』にはいくつか問題がある。最大の問題は偽作説である。現在通行の『孔子家語』は、三國魏の王肅の注がついた王肅本である。この通行本が王肅の偽作であると言うのである。

また、テキストの流傳の問題も複雑である。『孔子家語』の成立とその流傳については、一説に次のように言われる。

孔子の死後、當時の支配層や高弟達が記録した孔子の言行録があり、その中から最重要なものを取り出したのが『論語』で、残ったものをまとめたのが『孔子家語』である。その後、秦の始皇帝の焚書を免れ、漢王朝に傳わったが、テキストの混亂が激しかったため、孔安國が整理して四十四篇とした。さらに劉向の校定を受け、『禮記』と重複する篇が除かれた<sup>30)</sup>。

これが『漢書』藝文志・六藝略・論語類に著録された『孔子家語』二十七卷である。

三國時代に魏の王肅が孔子の子孫の孔猛から家傳の『孔子家語』を提供され、自注を加えて公開した。これが四十四篇の王肅本といわれるものである。

王肅本は、宋代に刊本が作られたが、その後、姿を消した。かわって通行したのは王廣謀本である。これは元代に王肅本の本文をダイジェストし、標題(小見出し)・音注・校勘を付したものである。元の時代の風潮にあったのか、王廣謀本は広く普及し、逆に王肅本は姿を消してしまった。

明代前半の何孟春はこれを嘆き、宋版の『孔子家語』の復元を試みたが、結局現物を見ないまま想像に頼って八卷四十四篇の何孟春本を制作した。その後、明代後半の著名な出版業者の毛晉が奇跡的に宋版『孔子家語』を発見し、覆刻した。これが汲古閣本である。

王肅偽作説は、王肅が反鄭玄の旗幟を鮮明にし、『孔子家語』をその有力な武器としたため、信憑性を増した。確かに漢代に『孔子家語』の名は聞かなかったのに、魏になってから突如として出現し、しかも王肅の反鄭玄の學説を根拠づける記述に満ちている<sup>31)</sup>。あまりにも王肅に都合が良すぎるのである。魏晉時代に端を發した王肅偽作説は、南北朝・隋唐時代に勢力を増し、宋代に理論化された。そして清朝に至り、考證學(考據學)の親鄭玄・反王肅の風潮のせいで、王肅偽作説はもはや定説となり、その影響力は20世紀にまで及んだのである<sup>32)</sup>。

このように『孔子家語』は、原本は失われ、次善の版本である王肅本は偽作疑惑がつきまとい、しかも一度はまったく姿を消しているのである。まことに厄介な書籍と言わざるを得ない。王肅の潔白は到底信じられないし、毛晉の版本も胡散臭さが皆無とは言えない。そうだからと言って、それが本當に、『論

30) 『孔子家語』後序による。

31) 王肅が、『孔子家語』を用いて、鄭玄説を批判し、自説を展開した例は、拙著、『中國明堂思想研究 王朝をささえるコスモロジー』(東京：岩波書店、2018年)、78-83頁を参照。

32) 『孔子家語』王肅偽作説については、拙稿、『『孔子家語』の流傳と評價との再検討』(『九州中國學會報』51, 九州中國學會、2013年)を参照。

話』と同根の孔子の言行録を含んでいるとすれば、捨て去るのは甚だ惜しいのである。

## 2) 日本における『孔子家語』

日本においては少々事情が異なる。『孔子家語』は奈良時代・平安時代には日本に傳わり、讀まれていた可能性が高い<sup>33)</sup>。降って室町時代の1515年(永正12)には、上杉憲房(のりふさ)(憲實の孫)が足利學校に『孔子家語』の寫本を寄進している<sup>34)</sup>。安土桃山時代末期に、足利學校から庠主、元佶を招き、京都伏見で徳川家康が活字によって出版させた伏見版の開版第一號は『孔子家語』だった。

さて、江戸時代に入ってから、元和版(げんなばん)等の『孔子家語』が各種、刊行されたが、ここで底本に大きな變化が起きたのである。すなわち、上杉憲房寄進足利學校藏寫本、伏見版の底本がいずれも王廣謀本だったのに對し、元和版をはじめとする江戸時代の版本の底本は王肅本だったのである。

前述の通り、『孔子家語』は中國では元代から明代前半までは王廣謀本が主流で、毛晉汲古閣本が登場してからは王肅本が普及した。

では日本の底本の變化は中國のそれを反映しているのかと言えば、實はそうではない。日本の王廣謀本の底本は室町時代に傳來した元版覆刻朝鮮古刊本であり、王肅本の底本はそれよりも古く傳來し、代々受け繼がれた宋刻本だったと推定されるのである<sup>35)</sup>。

足利學校第九代庠主、元佶は、戰國の世と足利學校の救世主として現れた

33) 日本における、『孔子家語』受容については、拙稿、「日本に於ける『孔子家語』の受容：徳川時代を中心として」(『日本中國學會報』65, 日本中國學會, 2013年)を参照。

34) この『孔子家語』は、『新刊標題句解孔子家語』(六卷全二冊)だった。川瀬一馬前掲書44頁、及び足利學校遺蹟圖書館『足利學校珍書目録』(栃木縣足利町、足利學校遺蹟圖書館, 1911年)35頁を参照。

35) 山城喜憲,「知見孔子家語諸本提要(一)」(『斯道文庫論集』21, 慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫, 1984年) 191頁を参照。

家康の恩に報いるため、下賜された活字で最初に『孔子家語』を刊行した。それはこの書が「聖人奥義、治世要文」、つまり孔子の奥義であるところの國家支配の要點を述べた書籍であり、世に大きな裨益となるからである<sup>36)</sup>。

すなわち、伏見版の刊行の目的は、太平の世を開くために必要な聖賢の要訣が満載された書籍を家康に提供することにあった。そして『孔子家語』がその第一號に選ばれたのは、「聖人奥義」「治世要文」を伝える書籍と看做されたからなのである。

## 2. 江戸中期の社會と『孔子家語』

### 1) 岡白駒の『補註孔子家語』

1638年(寛永15)、元和版を底本に整版によって覆刻した寛永本が出版された。この本は日本獨特の訓點が施され、『孔子家語』をより身近なものにした。

1741年(寛保1)、岡白駒(おか・はっく)が『補註孔子家語』を出版した。これは元和版、寛永版をもとに校勘作業を行なって定本を作成し、王肅本四十四篇の本文と王肅注の全て、及び白駒の補註を収めたものである。

『孔子家語』の價值について白駒は、「六經以外では、幸いに『孔子家語』が現存している。熱心な學習者にとっては實に、古學の餽羊である。」<sup>37)</sup>と述べる。「古學餽羊」とは孔子の時代の學問を今に伝える貴重な書籍との意味であろう。

岡白駒の『補註孔子家語』はベストセラーとなったが、實際のところ、學問的に獨創性があるわけではない<sup>38)</sup>。學問的、政治的に注目すべきは、翌1742年

36) 三三元元信, 「『標題句解孔子家語』跋」(〔元〕王廣謀『標題句解孔子家語』, 京都, 慈眼活字印, 1599年)を参照。

37) 岡白駒, 「『補註孔子家語』序」(岡白駒『補註孔子家語』, 京都: 風月堂, 1741年)。

38) 岡白駒の學問とその『補註孔子家語』との評價については、拙稿「日本に於ける『孔子家語』の受容: 徳川時代を中心として」を参照。

(寛保2)に出版された太宰春臺(だざい・しゅんだい)の『増註孔子家語』である。

## 2) 太宰春臺の『増註孔子家語』

太宰春臺は父の言辰(のぶとき)が『孔子家語』を愛讀していた影響を受け、幼時より『孔子家語』に親しんだ。古學の有力學派、古文辭學派の荻生徂徠(おぎゅう・そらい)の門下に學び、學問面での後繼者に目された。師の徂徠は『孔子家語』に對しては、あまり關心を示さなかったが、春臺は孔子の直弟子が傳えた書籍であると認識していた。そこで『増註孔子家語』を著し、自己の私塾、紫芝園(ししえん)での會讀(少人數で原書を読み討論する形式の授業)のテキストに用いた<sup>39)</sup>。

さて、春臺によれば、『家語』(原『孔子家語』)と名付けられた、孔子の弟子がまとめた、孔子の言語・行事及び弟子たちとの對話、議論の記録があったが、その中の純粹正實な部分を抽出して文章を整えたものが『論語』である。『孔子家語』は孔子の肉聲を傳え、『論語』を補完し、禮樂復興に貢獻する重要な書籍なのである<sup>40)</sup>。孔子は五經の成立に深く関わったが、それは天が孔子に下した天命に對する回答だったのであり、弟子との問答の内容は、『六經』之奧義、聖人之祕旨に他ならない。それを弟子が記録して傳承した書籍が、『孝經』、『論語』、『孔子家語』なのである<sup>41)</sup>。

江戸時代中期から後期にかけての儒學者、千葉芸閣(ちば・うんかく)は1789年(寛政1)に、春臺の『増註孔子家語』に自己の注釋を加えた『箋注孔子家語』を出版し、その自序の中で、「王侯・貴人・大夫・庶土」が『孔子家語』を朝夕誦

39) 山城喜憲, 「知見孔子家語諸本提要(二)」(『斯道文庫論集』22, 慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫, 1987年) 32頁 所引「寛保三年十一月五日大宰伴十郎宛書簡」を參照。

40) 太宰純, 「『増註孔子家語』序」を參照。

41) 太宰純, 「『論語古訓』序」(太宰純『論語古訓』, 江戸: 崇山房, 1792年再版(初版1739年))を參照。

習して「綱紀」、つまり國家支配の根本原理を獲得すれば、人倫道德ばかりではなく、社會生活全般に通じ、天下萬民は心服する、と述べた<sup>42)</sup>。

ここには二つの認識がある。すなわち、まず『孔子家語』を読む目的はそこに書かれている國家支配の根本原理を習得することである。つぎに、『孔子家語』の讀者として想定されているのが「王侯・貴人・大夫・庶士」、日本風に言えば、上は徳川將軍・諸大名・上級武士・下級武士に至るまでの武士階級に限定されていることである。大前提として江戸時代においては、國家支配に携わる權利があるのは武士だけなので、それゆえに武士は皆すべからく『孔子家語』を熱心に読み、國家支配に活用すべし、と言うのである。

同様の認識は、芸閣の弟子で幕府家臣である鹽野光迪(しおの・みつてる)も抱いていた。光迪は、1789年(寛政1)秋に書いた「標箋孔子家語跋」の中で、「王侯・卿・大夫」は『孔子家語』を披閱して孔子の言葉を信奉し、徳治・文治の要諦を學んで國力を充實させ、國家を安泰に導かねばならない、と言う<sup>43)</sup>。

前項で見たように、慶長年間、元佶は『孔子家語』が「聖人奥義」「治世要文」と言明した。江戸中期に太宰春臺は、『孔子家語』は『六經』之奥義、聖人之祕旨」すなわち孔子の道を伝える書籍の一つに他ならないと信じた。江戸中期から後期にさしかかる頃、千葉芸閣、鹽野光迪は、武士階級は國家支配に關わる資格と責任とを有し、それゆえに『孔子家語』に込められた「綱紀」、天下國家に有益な「治道」を修得して實踐せねばならないと述べた。

ここには、『孔子家語』は國家支配の奥義書であり、為政者たる武士の必讀書であるとの共通認識がある。元佶が室町時代以來の傳統を誇る武士の學校、足利學校庠主であることを考慮に入れば、日本において武士が權力を握り、熾烈な生存競争を繰り廣げた戰國時代を経て、百年を過ぎる頃までは、日本社會における『孔子家語』に對するこの認識は一貫していたと言えるであろう。

42) 千葉芸閣, 「『標箋孔子家語』序」(千葉芸閣, 『標箋孔子家語』, 江戸: 崇山房, 1789年)を参照。

43) 鹽野光迪, 「『標箋孔子家語』跋」(『標箋孔子家語』 卷末)を参照。

しかしながら、江戸後期に至り、天下泰平の世が百年を超えて續くようになり、戦國時代以來の緊張感が途切れた時、この認識に微妙な變化が訪れる。

### 3. 江戸後期の社會と『孔子家語』

#### 1) 冢田大峯の『冢註孔子家語』

大峯の『冢註孔子家語』は1792年(寛政4)に出版された。その序の中で大峯は自己が『孔子家語』の熱心な讀者であったこと、『孔子家語』が『論語』と對偶をなすことを述べる。しかしながら、前時代の春臺や芸閣、光迪のように、『孔子家語』が國家支配の奥義であり、為政者たる武士が讀むべきであるなどとは、聲高には説かない。

確かに大峯は、學問の目的は孔子の教育方法によって、孝悌忠信仁義という人倫道德を導き、天下國家を治めることにある(「大峯意見書第二」とする。しかし同時に、明倫堂督學就任時に示した「戒約」では、學問の目的が、孝悌忠信の儒教倫理を根本とする官吏の育成にあることを述べた。

この二つの學問觀は一見、矛盾するようだが、天下國家の支配は究極の目的であり、模範的官吏となることはその途上にある中間の目的と考えれば矛盾はない。『孔子家語』は國家支配の奥義であるが、官吏の奥義でもあるのだ。實際、大峯は官吏の心得として『孔子家語』の中から入官篇を取り出して、五十丁にわたって入念に解説している。

『入官第一義』と題されたこの書籍は、『孔子家語』(入官篇)や『大戴禮記』(子張問入官篇)に記載された、仕官する人のために孔子が述べた官職在職中の人民支配理念であり、「士」が第一に修得すべき道理である。大峯は、聖人の政治の道に關心のある「大夫士」に官職に就く心得を求められて、これを日本語で解説したのである<sup>44)</sup>。

この書は刊行年がないが、卷末に付された「雄風館著書目録」等から推定す

ると、1803年から1807年までの間に出版された可能性が高い。この間はまだ明倫堂督學就任前で、江戸の私塾、雄風館で子弟の教育を行っていた。とはいえ1781年(天明1)に尾張藩藩主宗睦(むねちか)の侍講となり、それ以来尾張藩と密接な関係を築いていたから、大峯が『入官第一義』を書いて與えた「大夫士」は、雄風館に出入りしていた武士でなければ、藩主近習の尾張藩士だったと考えられる。

『孔子家語』入官篇、『大戴禮記』子張問入官篇は<sup>45)</sup>、孔子が弟子の子張が入官(仕官)について質問してきたのに對し、官吏がどう人民に對應すべきかを懇切丁寧に語った教えである。

大峯が督學に就任して後、明倫堂の學風は一新した。前述の通り、明倫堂の教育課程は大峯が定めた「戒約」「讀書次第」に明示された。1822年(文政5)頃には、典籍(學生への講釋、書籍管理系の儒者)が會讀のために管理する書籍の貸し出し規則が定められた。そこからは次のような明倫堂での學問の詳細が窺える。

講堂には「讀書次第」が掲示された。

本業の十三書は素讀を行う。それが終われば他の雜書の借り出しが出来る。

本業の經傳すべて、助業の中の『史記』『漢書』までを通覽する。それが終われば通俗物の雜書の借り出しが出来る<sup>46)</sup>。

明倫堂の教育課程では日課必讀とした十三書には自註を用いて教えたのが特徴である<sup>47)</sup>。この改革の効果は大きく、前任二名の朱子學者督學時代は30~40

44) 冢田大峯, 「『入官第一義』序」(冢田大峯述, 「『入官第一義』, 江戸: 雄風館藏」, 刊行年不明)を参照。

45) 高瀬代次郎, 『冢田大峰』(東京: 光風館, 大正8年)「五十 明倫堂の改革」「五十七 明倫堂の中興」を参照。

46) 文部省編, 『日本教育史資料』(文部省大臣官房報告課, 1892年)六卷十八 諸藩ノ部 古記録 舊名古屋藩, 226頁を参照。

47) 高瀬代一郎, 前掲書「五〇 明倫堂の改革」を参照。



名に減じていた學生數は、最盛期200名を數えるまでになった<sup>48)</sup>。

## V. 結語

### 藩學と儒學

近世東アジア世界の普遍的現象である書院の發達は、日本においては江戸時代の藩學、私塾の普及という形で現れた。

藩學は、藩の家臣の子弟教育のために建てられた。彼らはいうまでもなく武士であった。武士は本来、戦場で果たす役割に最大の価値を見出したが、江戸時代の武士には平時の為政者(支配階級)の役割を期待されたのである。

武士が何故に支配階級であるのか、江戸時代に武士であること存在理由は何か、それが江戸時代の武士の直面した問題だったであろう。だとすれば、武士が他の階級を支配する理由を教えること、あるいは為政者としての理想像を提示することこそが、まさに學校が提供すべき教育内容だったはずである。藩學では主に漢學、特に儒學を教育した。それは儒學にこそ為政者としての理想像があったからである。

しかしながら、武士にとって儒學が最初から、為政者としての自覚を促すための學問だったわけではない。それは足利學校の教育理念と教育内容から理解されよう。

### 足利學校と社會

鎌倉幕府成立以降、日本は武家社會に突入した。武士はいついかなる時に

---

48) 高瀬代一郎、前掲書「五七 明倫堂の中興」を参照。

死命を決する場面に遭遇するかわからず、運を天に任せる、つまり決断を超自然の力に委ねる傾向にあった。

元來、日本では平安中期以來、人々は陰陽道(おんみょうどう)の影響下にあり、各種占術に依存する傾向が強かった<sup>49)</sup>。冠婚葬祭は言うに及ばず、一切の日常生活はすべて占筮を参考にしたとされ、武士も例外ではなかった<sup>50)</sup>。

武家社会において占筮の需要は著しく高かったのである。一方、『周易』は足利學校以外では容易に學ぶことができなかった<sup>51)</sup>。このため、足利學校は不動の地位を確立していたのである。

足利學校が『孔子家語』を所蔵し、出版したことは注目に値する。それが江戸時代を開き、その時代を通じて多大な影響を与えた人物である徳川家康が愛讀した書籍だったからである。家康やその意を受けて『孔子家語』を出版した元衞らは、この書籍は孔子の奥義であるところの國家支配の要點を述べた書籍である、と認識していた。

### 江戸儒學と武士

このような、孔子が國家統治の奥義を知っており、儒學はそれを學ぶものという觀念は江戸時代になってからも引き繼がれ、太宰春臺、千葉芸閣、塩野光迪の『孔子家語』の序・跋から窺えるように、江戸時代中期ごろまでは明確に意識されていた。

ところが、太平が永續的になるにつれ、次第にこの觀念は平時の思想に轉化した。

49) 陰陽道とは中國の陰陽五行思想を基盤にして、日本獨自在に發達した思想・信仰であり、易の思想と結びついて、天文・曆數・龜卜・占筮等の方術に展開した。

50) 川瀬一馬、前掲書191頁を参照。

51) 川本慎自、『中世禪宗の儒學學習と科學知識』(京都:思文閣出版、2021年)109頁を参照。

寛政異學の禁が発令されると、昌平坂學問所を發信地にして、各地の藩學、私塾にいたるまで「白鹿洞書院揭示」を尊重したことが象徴するように、朱子學的な人倫思想が広く普及した。もっとも、「白鹿洞書院揭示」が日本で重視されるようになったのは、寛政異學の禁よりもずっと前からのことである。日本人の機微に合い、また太平の世に相應しい教えだったからであろう。

この新たな思潮が如何に強力だったかは、冢田大峯の儒學思想から窺える。大峯は、儒學の目的は孝悌忠信の儒教倫理を根本とする官吏の育成にあることと述べた。大峯は寛政異學の禁に強硬に反対し、朱子學獨尊を拒否したが、朱子學に通じる思想を抱いていたのである。

江戸儒學は武士が擔い手であり、享受者であった。武士にとって儒學は國家統治の原理であり、人倫道德の陶冶と社會的實踐の教學であった。武家社會の成立からしばらくの間は、前者に重點が置かれていたが、社會が平和を謳歌するようになると、學校の教育を通じて、次第に重點は後者に移るようになった。意圖的か否かは別として、それは東アジア世界で朱子學が受け入れられていった状況と軌を一にする。

書院を通じて朱子學的價值觀が社會に浸透するという、東アジア世界に普遍的な現象を江戸時代の日本も共有していたのであり、それは武士の書院において準備されたのである。

【參考文獻】

- 大塚遜, 「昌平志」卷二, 同文館編輯局『日本教育文庫』學校篇, 東京:同文館, 1911年
- 岡白駒, 「『補註孔子家語』序」, 岡白駒『補註孔子家語』, 京都:風月堂, 1741年
- 三要元佑, 「『標箋句解孔子家語』跋」,〔元〕王廣謀『標箋句解孔子家語』, 京都:慈眼活字印, 1599年
- 鹽野光迪, 「『標箋孔子家語』跋」, 千葉芸閣『標箋孔子家語』, 江戸:崇山房, 1789年
- 神宮司庁古事類苑出版事務所, 『古事類苑』文學部 洋卷第2卷, 東京:神宮司庁, 1896-1914年
- 太宰純, 「『増註孔子家語』序」, 太宰純『増註孔子家語』, 江戸:崇山房, 1742年
- 太宰純, 「『論語古訓』序」, 太宰純『論語古訓』, 江戸:崇山房, 1739年
- 千葉芸閣, 「『標箋孔子家語』序」, 千葉芸閣『標箋孔子家語』, 江戸:崇山房, 1789年
- 冢田大峯, 「戒約」, 同文館編輯局, 『日本教育文庫』學校篇, 東京:同文館, 1911年
- 冢田大峯, 「大峯意見書第二」, 關義一郎編, 『日本儒林叢書』第三冊史傳書簡部「寛政異學禁關係文書」, 東京:東洋圖書刊行會, 1928年
- 冢田大峯, 「『入官第一義』序」, 冢田大峯『入官第一義』, 江戸:雄風館, 刊行年不明
- フロイス, 『日本史』2, 東京:平凡社, 1965年
- 〔北宋〕歐陽脩等, 『新唐書』, 北京:中華書局, 1975年
- 〔東周〕穀梁赤, 『春秋穀梁傳』, 〔清〕阮元校刻『十三經注疏』, 北京:中華書局, 1980年
- 〔前漢〕班固, 『漢書』, 北京:中華書局, 1962年
- 〔清〕彭定求等, 『全唐詩』, 北京:中華書局, 1960年
- 足利學校遺蹟圖書館, 『足利學校珍書目録』, 栃木縣足利町:足利學校遺蹟圖書館, 1911年
- 吾妻重二, 「東アジアの書院についてー研究の視角と展望ー」, 『東アジア文化交渉研究』別冊2, 2008年
- 川瀬一馬, 『増補新訂 足利學校の研究』新装版, 東京:吉川弘文館, 2015年
- 川本眞白, 『中世禪宗の儒學學習と科學知識』, 京都:思文閣出版, 2021年
- 關山邦宏, 「『白鹿洞書院揭示』の諸藩校への定着とその實態」, 『教育研究』21, 1977年
- 高瀬次郎, 『冢田大峯』, 東京:光風館, 1919年

難波征男, 「“日本書院”的研究現状與課題」, 『湖南大學報(社會科學版)』 21-3, 2007年  
堀勇雄, 『林羅山』, 東京: 吉川弘文館, 1990年.

南澤良彦, 「《說文解字》在日本」, 『許慎文化研究(二): 第二屆許慎文化國際研討會論文集, 第2卷』, 中國社會科學出版社, 2015年.

南澤良彦, 『中國明堂思想研究 王朝をささえるコスモロジー』, 東京: 岩波書店, 2018年.

南澤良彦, 「『孔子家語』の流傳と評價との再検討」, 『九州中國學會報』 51, 2013年

南澤良彦, 「日本に於ける『孔子家語』の受容—徳川時代を中心として—」, 『日本中國學會報』 65, 2013年.

Minamizawa Yoshihiko and Chien Iching, An Enquiry into the Origins of Confucian Academies and the Mingtang in the Tang Period, V.Glomb, E.J. Lee& M. Gehlmann ed., Confucian Academies in East Asia, Leiden: Brill Academic Publisher, 2020

山城喜憲, 「知見孔子家語諸本提要(一)」, 『斯道文庫論集』 21, 1984年.

山城喜憲, 「知見孔子家語諸本提要(二)」, 『斯道文庫論集』 22, 1987年.

Abstract

Confucian Studies in the Edo Period and Society  
: From the Perspective of Confucian Academies for Warriors  
and the Kongzi Jiayu

Minamizawa Yoshihiko\*・Chien Iching\*\*

During the Edo period Japan was a status-based feudal society, and civil service examinations were not used for appointing officials, as official posts were basically hereditary. Warriors, who made up the ruling class standing at the pinnacle of the pyramid structure of Japan's status-based society, had no need to sit any civil service examinations, and yet they still received a Confucian education. Why would this have been so? Schools that provided instruction in Confucian studies during the Edo period were not called shoin (Ch. shuyuan) 書院, or Confucian academies, but nonetheless they provided various functions such as lectures, libraries, and religious ceremonies and were, practically speaking, no different from shuyuan. Edo-period Confucian studies occupy a quite important position when considering shuyuan in East Asia and Confucian studies in East Asia. The growth of Confucian studies in the Edo period and contemporary social trends were closely interconnected. This article examines schools that provided instruction in Confucian studies, the academic tendencies of Confucian scholars, teaching materials, school

---

\* Lead author : Minamizawa Yoshihiko, Professor, Chinese Philosophy at Kyushu University / nanze@lit.kyushu-u.ac.jp

\*\* Co-author : Chien Iching, A senior researcher, Department of Philosophy Faculty of Humanities, Kyushu University

regulations, and so on. The schools that provided instruction in Confucian studies during the Edo period did not just serve as Confucian academies for warriors, and they also exerted considerable influence on society. In reality, Confucian scholars of the Edo period were by no means solely preoccupied with the Neo-Confucianism of Zhuzi's 朱子 school, and the Kongzi jiyu 孔子家語, too, was attracting the attention of Confucian scholars and warriors at the time. Because this work had been a favourite book of Tokugawa Ieyasu 徳川家康, it also found favour among warriors. What was the value of the Kongzi jiyu? And how did scholars evaluate it? By considering these points, this article examines changes in Edo-period Confucian studies and the core that underpinned warrior society. In addition, it is also hoped that it will provide a new perspective on the study of shuyuan in East Asia and make a small contribution to it.

Key word : Edo-period Confucian studies, society, warriors, domainal schools, Confucian academies for warriors, Ashikaga School, Tsukada Taihō, Kongzi jiyu

논문 투고일: 2022. 11. 21 심사 완료일: 2022. 12. 15 게재 확정일: 2022. 12. 20

